日本クリスチャン・アシュラム連盟

# 日本アシュラム

アシュラムとはスタンレー・ジョーンズ師がインドの退修方式を取り入れて創設されたキリスト教の新しい祈祷運動である。

開心・静聴・充満・献身・奉仕　175号

## 「わたしの軛（くびき）を負うて学べ」

マタイ 11：28～30

伊藤　節

今日のみ言は聖霊の働きをよく顕していると思います。み言にある軛とは2頭の農耕牛の首の上側に渡す共通の1本の横棒の事で、1頭毎ではバラバラになる力を一体化させるものです。軛に括り付けられると農耕経験のある牛（経験牛）は農夫の命令に服従するので仮に他方が未経験牛でも2頭は一体化して農夫の命令に従った動きをします。今日のみ言28節「イエスのもとに来なさい」と。即ち悪魔の世界を脱出して神の世界で生きよ（コロ1：13～14）。救われよ①信じて告白（ロマ10：9～13）②聖霊内住（黙示3：20）③受洗（マタイ28：19）と言われました。次に29節「イエスは柔和で遜った者。イエスの軛を負うてイエスに学べ」と。即ち救われた信仰者の人生のあり方を示されました。即ち①イエスの軛を負うとは、農夫イエスを経験牛、信仰者を未経験牛に見立て、イエスのご支配が堅く信仰者に及ぶ事の比喩です。これは聖化の経験者の姿です（ロマ6：11、ガラ2：19～20）。併せて信仰者の長子なるイエスを顕しています（ロマ8：29、ヘブライ1：5～6）。②イエスに学ぶとは、未経験牛が軛を共にして経験牛の動作を体得する様に聖霊の強い働きに頼んでイエスそのものの体得に努め自分にキリストの形が成る迄を目標に生きる事です（ロマ8：29、ピリピ3：9）。しかし軛を共にしていても2頭の牛の足並みが乱れる時もあります。これが聖霊のご支配の下にありながら罪を犯して仕舞う信仰者の姿です（ロマ7：7～24）。③イエスは柔和で遜った者とは、軛を負う2頭の牛は運命共同体です。足並みが乱れて経験牛に荷重が増し加わっても耐えこらえます。同様にイエスは軛を共にする信仰者の心身の動揺や乱れをただ耐えこらえるのみならず支え補い赦し気遣う等して励まされます（ロマ7：25～8：39）。イエスは愛の方謙遜の方（ヨハネ15：9、ピリピ2：6～8）だからです。28節29節に「休ませる。休みが与えられる」とあります。イエスは悪魔に属するこの世で神の世界を生き、偽りの世に本物の世界を詳らかにしました（ヨハネ1：1～18）。それ故この世にあっては苦難のご生涯でした（エペテロ2：4、ヨハネ16：33、Ⅱコリ6：14）。このイエスの苦難を越える苦難はありません。信仰者がイエスの軛を負う時多少なりイエスの苦難に与りますがイエスの苦難に与る程に荷の大半を担い居るインマヌエルのイエスを実感し慰められ今日のみ言30節「イエスの軛は負い易く荷は軽い」を肌で感じるのです。そしてこの世が生み出す艱難にも耐えられる様になります。イエスは主なり！

（日本ホーリネス教団・牧師）

## 霊想

# 「生れてからきょうまで わたしを養われた神」

日本基督教団更生教会
牧師　山口　紀子

創世記四八・一五（口語訳）

一　神の摂理

ヨセフの生涯には、父祖たちのように神が直接介入する出来事はありません。しかしその背後には確かに神がおられ、導きがあります。

ヤコブを家長とするこの家庭は愛憎渦巻く家庭でした。そこに父の、ヨセフへの偏愛。兄たちはまともに話せないほどにヨセフを憎みます。そして起きた、野原での出来事。―ヨセフは確かに兄弟に殺されかけました。奴隷として売られました。それでもなお、命は助かった事に目をとめます。

私達はそれぞれに戦いがあります。人間関係、経済、病気。自分は今、深い穴の中にいると感じている方もおられるでしょう。それでもなお、その最悪にみえる状況の中で、居場所を教えてくれた人や、イシマエル人の隊商のような助けがなかったでしょうか。

あなたが気づいていないだけではないでしょうか。人が全く気づかない時にも神様の計画は進行中です。神はヨセフをご自身の僕として用いるために特別に訓練をしようとしておられたのです。父ヤコブが悲痛な叫びをあげるその時に、誰も知らない―いいえ、神だけが知るところでヨセフはエジプトでパロの役人の奴隷となっていくのです。

二　過去の再評価

人は過去の出来事を変える事はできません。しかしその評価は変えられます。私達の過去の傷。その傷に神の光があてられ、意味を見出した時に、それは癒されていきます。

創世記四一・一は直訳すると「満二年の日々が全て終わり」となるそうです。牢の中で給仕役の夢を解いてからの、忘れさられた二年。しかしそう思うのは人間で、神様は忘れていなかった。これまでもヨセフはエジプトで訓練を受けてきました。しかし神様は、彼を整えるためにさらにこの二年を必要とした、という含みが読み取れます。

時満ちて、ヨセフはパロの夢を解きます。一転、総理大臣へ。しかし若き日の高慢な姿はもうありません。奴隷として仕える厳しさ、冤罪で投獄される痛み苦しみを知る彼は、これが神の業であることを知っています。それは彼が子どもにつけた名前からも伺えます。

長男マナセ。「忘れさせる」という意味です。やはりこの一三年間はヨセフにとって苦しみであり、忘れたい事でした。しかしそんな名をつけたら、名前を呼ぶ度に逆に過去の傷を思い出すのではないでしょうか。

そうではないのです。「マナセ」、それは、その傷を忘れさせるほどに、私の主はよくして下さった。そちらに重きがあるのです。

次男はエフライム。「増やす」、「神が私を悩みの地で、豊かにせられた」。

今いるところがあなたの場所です。そこは悩みの地かもしれないけれど、その場所で、神様はあなたを祝福しようとしておられます。それが神の摂理です。

さて、飢饉になると食糧を求めてヨセフの兄達もやってきました。彼らは自分にした仕打ちを悔やみ、その事で罰を受けているのだと受け止めている。そう知った時に、ヨセフは真実を明かして言います。

「神は命を救うために、あなた方より先に私を遣わされたのです。…それゆえわたしをここへ遣わしたのは、あなた方ではなく、神です。」

これがヨセフの過去の再評価です。

それは兄弟にも起こります。罪悪感を負って生きてきた彼らに、ヨセフが過去をあえて突きつけたのは、罰するためではなく赦すためでした。彼らはヨセフを通して神の赦しの前に立たされたのです。

神の赦しが先にあります。そのもとに人は悔い改めに導かれます。そして悔改めた時に、神の赦しはその人のものとなるのです。兄たちは、赦しと和解の恵みを携えて、父ヤコブのもとへ帰るのです。

最後に。三七章二節を新改訳は「これはヤコブの歴史である」と訳しました。つまり、聖書はヨセフ物語を父ヤコブの歴史として語るのです。表題の告白は、ヨセフではなく父ヤコブの告白です。実にヤコブの生涯も、神の摂理の中に持ち運ばれ、傷ついた過去も主によって癒された事がわかります。

あなたもそのように、神の摂理の中で、いま生かされているのです。

## 証

# 「アシュラムに招かれて」

更生教会　長田　慶子

更生教会では一昨年より第三、第五主日、礼拝前の三十分間「聖書を読む会」が持たれています。昨年より教育部担当役員として出席。毎回近隣者のみならず遠距離の方々も集

い、八名から十名、山口牧師導きのもと、聖書の黙読から始まり、恵みの分ちあい。理解出来ない箇所を山口牧師にひもといて頂いたりし、十時五分頃山口牧師退席後、信徒のみで恵みの分ちあいの続き。これがまた盛り上がる。十分間があっと云う間に過ぎ礼拝へ。すべりこみセーフなんて事も…。「もっと時間が欲しいね」等々の声もあがり、ある時「例えば教会アシュラムが開けたらどうかしら」と個人的にきいたところ「参加出来るかも」等々の声を頂いた。

東京新生教会や浦和別所教会で既にもたれている「教会アシュラム」にすごーく関心あり、いつかお訪ね出来たらと祈りに覚えていました。今日、この様な形で東京新生教会に招かれた事、神様が先にレールを敷いて下さった事と思われ感謝です。（ピリピ書2・13節）

城北アシュラム等へは加齢も手伝いご無沙汰して居ますのでアシュラムについて証詞は出来ませんが、神様の恵みとあわれみによって救われて今ある事一部証詞出来ればと思っています。

私が初めて教会の門をくぐったのは十九才の誕生日。友人がお祝いにと連れて行ってくれたのが京王線明大前にある単立朝顔教会、それも祈祷会でした。羽鳥純二牧師先生が牧会されており、一年間の求道を経てイザヤ書一・十八節の聖言により救いの確信を得、二十才のXマスに受洗の恵みに預かりました。

熱心な仏教徒の両親でしたが反対はありませんでした。むしろ喜んでくれました。と云うのは四人兄弟の末っ子の私は生まれながら病いの子で医者からは「二十才まで生きられるかどうか」と云われていたそうです。娘が信仰を持って命ながらえたらとの思いがあったとの事。その二十才に受洗。只々神様の摂理の内にあった事と思われてなりません。

しかしながらその後十五年間も教会を離れ放蕩の道をさまよったりの私でしたが、不思議にも更生教会から二分と離れていない所へ嫁いで来ました。島牧師先生ご夫妻が牧会されていた更生教会の「光の子幼稚園」に二人の子どもが入園を許され、私自身エレミヤ三章二十二節の聖言により信仰をリバイブされ、島牧師先生が香港に発たれる直前に転入会の恵みにあづかりました。

それから後、いくつもの涙の谷を渡った事か知れませんが、それ以上に神様の恵みとあわれみが勝り、今日ある事おもいます。自分が祈れない時、いつも背後にあって「とりなしの祈」を献げ続けて下さっていた原田牧師ご夫妻そして兄弟姉妹の愛を忘れる事は出来ません。只々感謝。聖名を崇めます。詩94・17―19

## 第21回東京新生アシュラム報告

横山　基生

東京新生教会では、毎年2月第3聖日の前日の土曜日から日曜日にかけてアシュラムを持っています。今年は関東甲信に大雪が降った週末とぶつかりましたが、何とかアシュラムとしての形を取ることができ、主の助けと導きを様々なところに発見することができました。

例年ですと、土曜日の夜7時から開心の時を持ちますが、会員の高齢化等によって、夜の外出が徐々に困難となり土曜日の出席者が大変少なくなってきていました。そこで今回思い切って時間の変更に導かれ、午後2時半から4時半までを、開心の時と小グループでの分かち合いの時にしました。大雪のために近くに住んでいるものたちが集まり、結果的に教師4と信徒2名の計6名の参加でした。これが夜であったら信徒たちも参加が難しかったので、時間変更が幸いしました。

聖日の礼拝には、ゲスト立証者として日本基督教団更生教会の長田慶子さんに来ていただきました。他教会の方にアシュラムに来ていただき、証しをしていただくことは、アシュラムにとって命だなと思わされます。主は毎年素晴らしい立証者を与えて下さり、心から感謝しています。大雪の影響で、来ていただけるか心配でしたが、西武新宿線の花小金井駅まで来ていただき、そこからは牧師の運転の車で送迎することができました。大雪が一週間前のような土曜日から日曜日にかけて降ったら、車を出すことは大変難しかったのですが、金曜日から土曜日にかけて降ったので、1日準備の時間があり幹線道路はほぼ車が通れる状況でした。主の憐みでした。

信徒たちも、普段自家用車・バス・自転車で教会に来ているものたちは、それぞれ祈りつつ、様々な導きが与えられ参加できました。このことが大きな恵みの体験の中心となりまし

た。また、今回は、連鎖祈祷の恵みを覚える方が多くいました。

全体的な反省としては、静聴のときの持ち方に課題を感じました。礼拝の時間になんとか間に合って来られた方々が多かったのですが、教会に来てしばらくは日常会話が先行して、直ぐに主の御前に静まることができない人が多くあったことは大変残念でした。毎週の礼拝とは異なるプログラムの場合に、気を引き締める何らかの手立てが必要と思わされました。

## 第45回城北アシュラム報告

川村　秀夫

祈りを重ね準備して来ました第四十五回城北アシュラムが去る二月十一日（火・祝日）新宿西教会で開催されました。当日、東京は四十数年ぶりの大雪にみまわれ、参加される方々の足元が大変心配されましたが、幸いにも大きな混乱もなく無事に開催できましたことを主に感謝いたします。六十三名の参加者が与えられ、恵みのうちに城北アシュラムが持てましたことを感謝いたします。

十時から飯島延浩兄による城北アシュラムについてのオリエンテーションとそれに引き続いて開心の時が持たれました。自分のニードを皆さんの前で語るのは大変勇気のいることでありますが、多くの方が勇気を出して、今日皆さんに祈ってもらいたいニードを次々に発表して頂きました。

祈りの細胞ではお一人おひとりのニードを語って頂き、隣の方がその方のニードに対する執り成しの祈りをして頂きました。それぞれがニードに対する神様の御声が聞こえますようにと深く祈り合いました。

静聴の時は、天門教会貴村かたる師がロマ書八章十八～三十九節を選ばれ、この御言葉の中からそれぞれが示された聖書箇所をどのようにしてその箇所が与えられたか、示されたかを発表し、互いに恵みを分かち合ました。

今、私たちは神様の摂理を知ることが出来ませんが、御霊は執り成しの祈りをしていて下さり（八・二十六）、神の愛から切り離されないようにしていてくださいますから（八・三十九）、あとになって神の摂理がわかるようなものであることを教わりました。

福音の時は更生教会の山口紀子師が担当され、創世記四十八・十五節「生まれてから今日までわたしを養われた神」と題して福音のメッセージが語られました。ヤコブもヨセフも神様の摂理にもとづいて生きた人でありました。そして神の御業はヤコブの苦悩の中に現れていました。神様は私たちに訓練として試練をお与えになります。試練を通して神の愛を知ることが出来ます。神の光が当てられると過去は変えられないけれど、今から将来に人は変えられます。それは神の愛が働くために人は変えられるのですと語られました。静聴の時と福音の時が合体し、すばらしいメッセージであったと感じました。

二回目の祈りの細胞がもたれ静聴の時、福音の時を通してニードに対する答えが得られたとの発表がありました。祈りの細胞の時が祝福された瞬間であったと感じました。

充満の時は安藤脩師が担当され、全員が輪になって今日受けた恵みについて発表し合いました。皆さんが本当に祝福されて発表している姿を見て私は感動を覚えました。

## 日本アシュラム60年記念誌編集プロジェクト中間報告

▼　3月20日（木）午後3～5時・池の上教会で事務局レベルの編集会議を開きました。3月末〆切りで貴重な原稿が送られて来ており、三百ページ・30項目のレイアウト（文章写真の割付け）作業を始めています。ご加祷下さい。

▼　**アシュラム60周年記念誌出版のための篤志献金にご協力下さい。**

昨年10月の60年誌発刊理事会で百五十万円の収支予算が承認されましたが、その内の50万円を篤志献金を予定しています。額の如何に関らず是非ご協力お願い致します。

左記振替口座によろしく。

〒一八一―〇〇一一　三鷹市井口3―15―6
池の上キリスト教会内
日本クリスチャン・アシュラム連盟
振替口座　東京〇〇一〇〇―一四五五八